
a t a r a x i a

社飛生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ataraxia

【Nコード】

N3508F

【作者名】

社飛生

【あらすじ】

クルガン、シード、ルカの人格形成の元となる幼少期の話。

SAMPLE 1（前書き）

完全オリジナル設定ですので、許せない方はご遠慮下さい。

SAMPLE 1

もう 他に望む事なんてありはしないんだ

右手に汚れた君の手と

左手に腐りかけだ誇りとを握っていれば

見えない明日も怖くはないから

だから

背徳に伏せた瞳をあげていけ

ここは神だけが知らない ユートピア

(SAMPLE 1)

「…俺、…私がりディアを殺しました。」

耳鳴りがする。

まるで、雑踏の中から、急に無音室に放り込まれた時のような息苦しさと妙な圧迫感が、いつも、しきりに自分に付きまとってくる。

それは時には、微かな虫の羽音にも似ていて、それが聞こえてくると自分の立っている場所がわからなくなる時がある。

どこか野外にいるような、はたまた、窓もない狭苦しい部屋に押し込められているような。

物心ついた時からそうなので、今ではもう慣れたが、耳鳴りの強い時は、自分の声や心臓の音すらも不気味に響いて、クルガンは、ただじっと息を押し殺すしかなかった。

その時に似た長い沈黙の末、クルガンは一言、そうつぶやいた。
今、自分には話をする義務があったからだ。

「……………」

すると、騒がしかった薄暗い会場は一瞬にして静まり返り、人々の視線は、中央に立たされた少年に注がれる。

（……………ほら。冷や汗まで出てきたぞ。…全く耳障りだ……………」

誰にともなく悪態ついて、クルガンは軽く頭を振った。

今朝からずっと続いているこの耳鳴りにら、もう、うんざりだった。

…いや、もう幾日も前からだったか。

しばし考えるが、思い出せない。

最近は何もない夜が長く続くものだから、日にちの感覚がおかしくなっているようだ。

「母、リディアの行為は、父と私、そして神を裏切るものでした。」

淡々と話すクルガンに、非難の声はあがらない。それは、誰もがその事の重大さを知っていたからだ。

人々に英雄と謳われ、決点の一つも見つけられない人間、クルガンの父を妻であるクルガンの母、リディアは裏切ったのだから。

彼女に同情する者はいても、ここで実の母親殺しを名乗り出た、まだ十二才の幼い少年に対して向けられる瞳、そして、その裏に見える父へのそれは、どれも悲しみに満ちていた。

その上、その聡明な少年の背に涙すら見せる者もいる。

その幼さで、これほどの重荷を背負おうと言うのか、と。

「愛する者を失った愛は空しいだけです。」

それは、父に対してか、母に対してか。

言ってしまったから、クルガンは考えた。

愛する者を裏切ったのは父だったか、母だったか。

少なくとも、父は、母以外の女性に興味を持った事はないだろう。

昔から硬派で、仲間と酒を飲みに行くよりも、剣術の稽古をしている方が好きな人間だ。

人付き合いは得意な方ではなくて、殊更、女性と子供は苦手な様だった。

それでも、それが性分だったのかもしれないが、彼は、良き夫、良き父親であろうとしていたし、実際そうだった。

父は、母を愛していた。では、母は……。

(……いや、違うな。彼女も父を愛していたのだ。)

ただ、それは父のものとはあまりにも異なっていた。

それだけの話だ。

完璧な父の『愛』に対して、母のそれには、まるで全てをその渦に飲み込んでしまうかのような勢いと、情熱と華やかさがあった。

型を破る事もお構いなしで、ただ自分の思うままに、望むままに生きていた。

だから、誰もがその情熱に惹きつけられ、輝きに目を眩ませたのだ。そんな彼女が、自分に見合うだけの、同じだけの情熱を求めたとしても不思議はない。

自分が愛した分だけ返して欲しいと願う事は罪ではない。

ただ、それに、父は役不足だったのだ。

それは分かっている。

だが、クルガンは父を尊敬していたし、まして、母の行為が許される事ではないと知っていた。

まだ、十を過ぎたばかりのクルガンは、そう割り切れる程、大人ではなかったのだ。

(……あの情景を、俺は忘れる事はないのだろうか……。)

父と結婚して初めて贈られたと言う、赤いソファアーの上で動かなくなった母と、見も知らない男の姿。

その場から一切の音が無くなる寸前、彼女が何か言ったが、もうクルガンは何の音も聞きたくはなかった。

そして、血にまみれた自分の左手。

(……そういえば。)

あの一瞬だけ、いつも聞こえてる耳鳴りが消えていた。

「彼女の魂が、安らかに眠らん事を……。」

美しいままで逝った彼女は、いつまでも、クルガンの脳裏に鮮やかに蘇る。

それは美しい思い出と言うには、少し苦々しく、やるせない。

生まれて初めて見た激しい情熱は、それ故、クルガンを裏切り、自らも大切な何かを失っていた。そんなものを尊いものだとは思えなかったのだ。

愛のために生きて逝った彼女は、確かに記憶の中でさえも輝き続ける事だろう。

だが。

その輝きがいつしか自分の枷になっている事に、クルガンは気がついていていた。

『…愛しているわ。クルガン。』

愛されていたし、自分も愛していたと思う。

けれど、彼女のそれは自分には理解しがたくて、聞こえない振りをした。まるで、自分の息子が妻を殺したと知っても、ただ「すまない。」と呟いて目を伏せてしまった、父のように。

父にとってもクルガンにとっても、彼女の輝く情熱や愛は、何一つ自分のものにはならなかったのだ。

だから、その時に理解出来なかった情熱を、いつか理解しようとは思わない。

手に入れられなかった情熱が、欲しいとは思わない。

(…もう。)

もう、彼女程の情熱に出会う事はないのだろうから。

もう、何かを一途に愛する事が幸福だとは思えないから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3508f/>

a t a r a x i a

2010年10月28日06時55分発行